

群 教 ゼ	K05 - 03
	平14.206集

進んで外国人とコミュニケーションを 図ろうとする児童を育成する指導の工夫

- ふれあいタイムにおける「留学生との交流会」を通して -

特別研修員 手島 龍一

《研究の概要》

本研究は、普段、あまり外国人に関わる機会がない児童たちに、進んでコミュニケーションを図ろうとする実践意欲を向上させるための研究である。総合的な学習の時間において、群馬大学の留学生との交流会で、思いを自分なりの方法で伝えたり、相手の国について調べ質問したり、相手の話を聞く活動などを通して、言葉が通じなくても、お互いが分かり合おうとすれば多くのことを伝えあうことができることを、体験的に理解していく。
【キーワード：国際理解 総合的な学習 - 小 コミュニケーション 国際交流】

主題設定の理由

一般的に日本人は、コミュニケーションを図ろうとすることに消極的だと言われている。その一方で、国際化が進んだ現代社会においては、海外の多くの国の人たちとコミュニケーションをとる必要性が高まりを見せている。これからの国際化の時代を活躍するために大切なことは、異なる文化を持つ相手のことを理解しようとしたり、自分の思いを積極的に伝えようとしたりする意欲であり、言葉の壁を越えて関わり合いを持つという態度である。21世紀を生きる子供たちにとって、自ら積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度は、とても大切なことである。

児童は、低学年においては興味が先にたって行動するため、外国人にも積極的に働きかけ、進んでコミュニケーションを図ろうとする。しかし、学年が進み、中学年になると、言葉が通じなかった経験などが原因となり、コミュニケーションを図ることに、徐々に消極的になってしまう傾向が見られる。

本学級の児童（小学4年 36名）に対して、ALTとの英語活動において、外国人と積極的にコミュニケーションを図ることをねらいとして指導を行った。しかし、言語が通じないと、コミュニケーションが図れないと考えている児童が多く、あいさつをリピートしたり、ゲームやダンスを楽しそうに行ったりしてはいるが、積極的にALTとコミュニケーションを図ろうとする児童はほとんどいない。もっとコミュニケーションを図ってみたいと考えている児童もいるが、外国人との交流経験や、言語以外でのコミュニケーション経験が不足しているため積極的に関わることができないでいると思われる。

そこで、外国人に対して、いろいろな方法でコミュニケーションを図ろうとする意欲・態度を育成することが必要であると考えた。具体的には、総合的な学習の時間「ふれあいタイム」において、群馬大学の留学生との交流会を計画する。まず、伝える内容を子供たち自身の思いの中から考えるようにする。次に、伝える方法を絵や紙芝居、ジェスチャー、具体物といった自分なりの方法で考えたり準備したりする。これらの活動を通じて、海外からの留学生という、言語を異にする相手に「伝えたい」という意欲を高めることができると考える。そして、留学

生の出身国について調べたり、聞きたいことを考えたりすることで、相手の話を「聞きたい」という意欲を高める。この体験を通して、相手の気持ちや、相手の立場に立って考えることの大切さや、伝える側と聞く側とがお互い真剣に分かち合おうとすれば、多くのことを伝えあうことができることを体験的に理解できると考える。さらに、交流会をふり返り、感じたことを発表する活動を通して、喜びや達成感を友人と分かち合い、また、友人の多様な意見にふれることにより、コミュニケーションを図ることの素晴らしさへの理解が深まり、進んでコミュニケーションを図ろうとする実践意欲が向上すると考え、本研究主題を設定した。

研究のねらい

ふれあいタイム「海外からの留学生と交流しよう」において、自分の伝えたい思いを考え、自分なりに工夫した方法で伝える活動や、留学生の出身国について、聞きたいことを考え、話を聞く活動を行う。これらの活動により、進んで外国人にも自分の思いや言いたいことを伝えようとしたり、相手の言っていることをわかろうとしたりすることの楽しさを知り、進んで外国人とコミュニケーションを図ろうとするようになることを、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 ふれあいタイム 「留学生との交流会の準備をしよう」において、群馬大学の留学生との交流会を計画する。その中で、自分の伝えたい内容、伝える方法について考えたり、相手の国について調べ、質問することを考えたりする活動を行うことで、留学生に思いを伝えようとする意欲や相手の話を聞きたいという気持ちが高まるであろう。
- 2 ふれあいタイム 「群馬大学の留学生と交流しよう」において、自分の思いを自分なりの方法で伝える活動を行ったり、留学生の出身国の話を聞いたりすることで、言葉があまり通じなくてもコミュニケーションがとれることや、伝える側と聞く側がお互い真剣に分かち合おうとすれば、多くのことを伝えあうことができることを通して、相手の気持ちをわかろうとするものの大切さに気づくであろう。
- 3 ふれあいタイム 「交流会で感じたことを発表しよう」において、留学生との交流活動をふり返り、自分なりの方法で伝えられた喜びや達成感を、友人とともに分かち合うことにより、進んでコミュニケーションを図ろうとする実践意欲が高まるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「進んで外国人とコミュニケーションを図ろうとする児童」とは

児童は、学年があがるにつれ、言語によるコミュニケーション能力が向上し、自分の意見や考えを、言葉で上手に表現できるようになってくる。しかし、その反面、言葉が通じない相手に対しては、関わりを持つことに消極的になってしまう傾向がある。

また、多くの児童が、自分の思いや考えを相手に伝えたいと考えているが、相手の立場に立ち、相手の話もきちんと聞こうとする態度は、なかなか身に付いていない。

ここでいう「外国人と進んでコミュニケーションを図る児童」とは、言葉があまりよく通じないとしても、自ら外国人と関わりを持ち、言葉だけに頼るのではなく、様々な工夫をして自

分の思いを伝えようとするのと同時に、相手の立場や心を大切に、相手の話をきちんと聞いたり、理解したりしようとする態度が身に付いた児童のことである。

(2) 「自分の伝えたい思いや方法を考える」について

伝える内容を、自分の夢や興味のあることなどから自分で考え、ジェスチャー、紙芝居や楽器の演奏など、自分なりの方法を考え、準備や練習することは、伝えることに楽しみを見だし、伝えたいという気持ちを強く持つことにつながると考える。また、その後の活動に対する意欲の持続にもつながり、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度の素地を形成することにつながると考える。

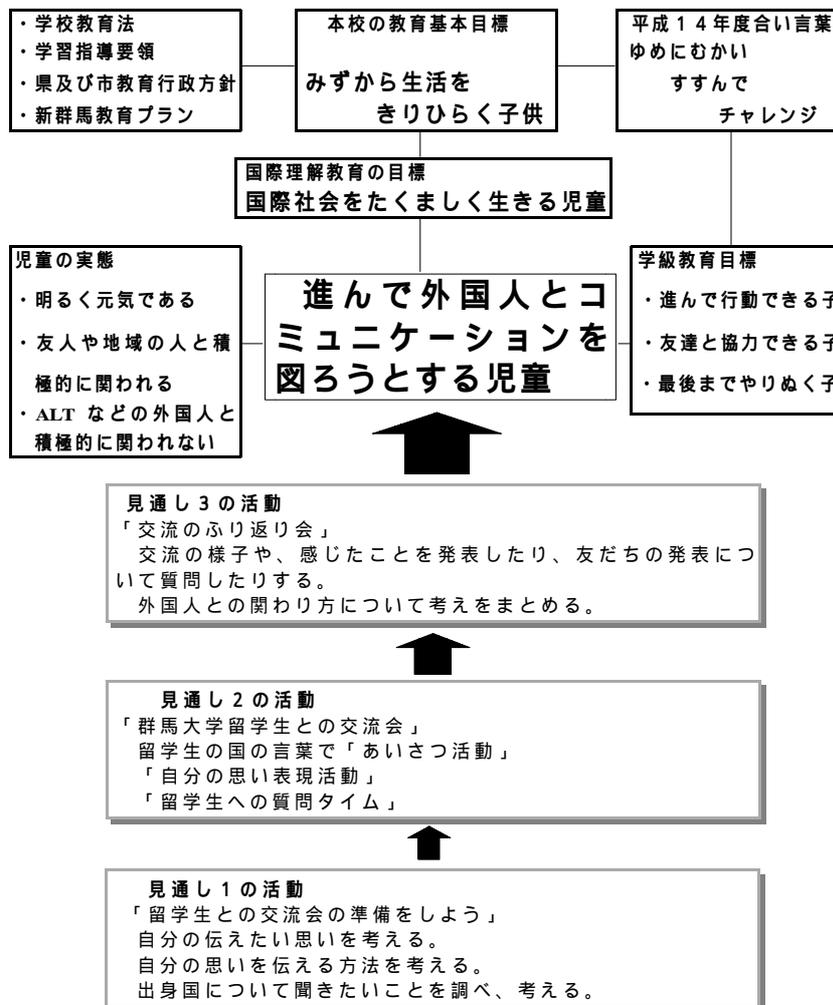
(3) 「群馬大学の留学生」について

群馬大学は、本校と隣接する国立大学で、多くの国から様々な職業の留学生を受け入れている。群馬大学の留学生は、自国で教職に就いている人も多く、児童との交流において熱心に関わりを持ってくれる。また、児童と同じ地域で生活しており、今回交流会を持つことにより、大学の文化祭や地域のお祭りなどで会った際に、継続的にコミュニケーションをとることが可能である。これらの理由から、交流の相手として「群馬大学の留学生」に協力を依頼した。

(4) 「交流のふり返り会」について

交流会を通して児童たちは、言葉は通じなくても多くのことを伝えられることや伝える喜び、相手の立場や気持ちを尊重することの大切さを体験的に理解できる。「ふり返り会」は、その児童たちに、感想や、率直な意見の交換ができる場を設定することで、一人一人がもう一度自己の体験をふり返り、コミュニケーションを図ることの良さを確認することをねらいとしたものである。さらに、友達の発表から新たな発見をしたり、多様な考え方に触れることにより、新しい良さに気づいたりすることもできる。これらのことを通して、コミュニケーションを図ろうとする意欲が、さらに向上すると考える。

資料 1 全体構想図



2 実践の概要

結果の考察にあたっては、学級全体の活動の様子および抽出児童A子によるワークシートの記述、授業後のカードの記述やALTとの関わり方の観察を中心におこなう。

A子は、活発で、友人や地域の方々と関わることができるが、外国人とコミュニケーションを図ることにに対して苦手意識があり、ALTとの英語コミュニケーション活動においても、積極的に参加することができないでいた。

(1) 「交流会の準備をしよう」において、伝える内容や方法について考えたり、質問することを考えたりする活動を行うことで、留学生に思いを伝えようとする意欲や相手の話を聞きたいという気持ちが高まったか。(見通し1)

ア 実践の概要

授業のはじめに「道で困っているお年寄りを見かけたらどうしますか」、「道で困っている外国人を見たらどうしますか」と尋ね、出された意見の比較から、外国人との関わりに対しての課題をとらえるようにした。外国人と積極的に関わることができるようになるために、群馬大学の留学生との交流会を行うことを知らせ、どの留学生と交流をしたいか希望をとり、グループ分けを行った。次に、自分の伝えたい内容について考えた。自分の好きなもの、今興味を持っていることや学校のこと、家族のことや習っているスポーツ、住んでいる地域のこと、日本の文化についてなど自由に発想させ、自己選択、自己決定を行うようにした。内容が決まったら、言葉の通じにくい相手にどうやって伝えるか、どんな方法が伝えるのに適しているのか、について考えた。また、留学生に質問する内容についても考え、図書室の本やインターネットを使い、出身国について調べる活動を行った。

イ 結果と考察

留学生は、日本語が少ししか分からないことを説明し、その相手に対して、自分の思いを伝えたり、相手の国のことについて質問したりするという交流会の内容を知らせ、交流会に対する思いを尋ねた。図1から分かる通り、授業を行う前では交流会で留学生と関わるのも、相手に伝えるのも「こわい」、「分かるはずないからいやだ」という意見が多くを占めていた。しかし、自分の伝える内容や方法を考え、伝える練習を行ったり、相手の出身国について調べ、質問することを考えたりして準備を進め、お互いに見合いながら内容や方法を見直し、班内発表で友人から「分かる、分かる」「それなら伝わるよ」などと言われていくうちに、児童は伝えることに、徐々に興味や自信を持つようになってきた。明日が交流会となった前日の児童の意識は、「交流が楽しみ」や図2のように「がんばって伝えよう」に変わってきたといえる。

A子は、自分の将来の夢について、写真やビデオを使って伝えようと考え、雑誌の切り抜きやコンサートのビデオなどを用意し、それらの資料を使って、伝える練習を一生懸命行ったり、友人と協力して、出身国について調べたりしていた。資料2のA子の

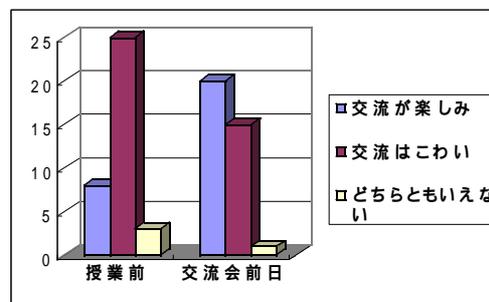


図1 交流会に対する思い(人数)

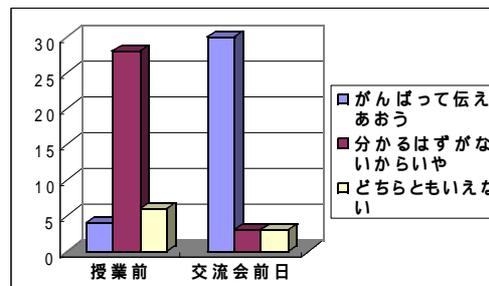


図2 伝える活動に対する思い(人数)

感想からは、伝える内容や方法を自分で決めて練習してきたことが、交流会での伝えることへの意欲に結びついていることや、出身国について調べた活動が、相手の話を聞くことへの意欲向上に結びついていることが読みとれる。これらのことから、自分の伝えたい内容や方法について考えたり相手の国について質問することを考えたりする活動を行うことは、外国人に思いを伝えようとする意欲や、相手の話を聞きたいという気持ちを高めるのに効果があったといえる。

資料2 A子の感想

明日の交流会について、今、思っていることを書いてください

がんばって、伝えれば、ぜひ、伝えたい、伝えたい、伝えたい、明日は、今まで練習してきたから、ぜひ、伝えたい、伝えたい、伝えたい、

留学生のお話を聞くことについて、思っていることを書いて下さい

私は、スロベニアについて調べました。調べていくうち、どんな国かともてりたくなりました。明日は、話が聞けるので、わくわくしています。

(2) 「留学生と交流しよう」において、思いを自分なりの方法で伝える活動を行ったり、出身国について質問したり、話を聞いたりすることで、言葉以外の方法でもコミュニケーションがとれることや、相手の気持ちを分かろうとすることの大切さに気づいたか。(見通し2)

ア 実践の概要

グループリーダーの進行のもと、グループごとに交流を行った。まず、事前に調べた、留学生の出身国の言語によるあいさつから入り、一人一人が、自分の思いを、劇、写真やビデオの活用、英語など、自分なりに工夫した方法を使って伝える活動を行った。次に、留学生の出身国について、学校のことや遊び、人気のある歌手などの質問を、調べた英語や練習したジェスチャーなど自分たちが用意した方法で聞き、相手に伝わらなかったときには絵を描いたり、辞書を使ったりするなど、あらゆる方法で相手に伝える努力をした。最後に、留学生の出身国の話を聞いた。

イ 結果と考察

直前まで、留学生と交流することに不安を抱いていた児童も、最初のあいさつによりリラックスし、交流会が始まると、自分の準備した方法で、生き生きと自分の思いを伝えたり、相手の国について質問を行うことができた。また、交流会の最後には、別れるのがつらく、廊下まで留学生を見送るなど、充実した交流会が行えたことをうかがわせた。交流会終了後にとった、「今日の交流会で、自分の思いを伝えることができましたか」という質問に対して35名中31名が「できた」と答え、「相手の話がわかりましたか」という質問に対して26名が、「わかった」と答えた。また、資料3「留学生に自分の思いを伝えるとき、相手の話を聞くときに大切なこと」

のアンケート結果からは、自分が一生懸命伝えようとしたことにより、相手に伝えられたことや、相手の話を分かろうとしたことにより、相手の話が分かったこと、さらには、それらがコミュニケーションにおいて、とても大切であることへの気づきを読みとれる。

これらのことから、多くの児童が交流会により、相手が外国人でも多くのことを伝えあうことができることや、「思いを伝えようとする意欲」や「相手の気持ちを分かろうとすること」の大切さに気づくことができたといえる。

資料3

相手に伝えるとき

- 意欲**
・がんばって伝えようとする気持ち
・一生懸命さ、意欲 (29)
- 工夫**
・ジェスチャーや色々な工夫をする (16)
- 態度**
・恥ずかしがらない
・あきらめない
・はっきり言う
・くり返して言う
・相手を見る (9)

コミュニケーションで大切なこと

相手の話を聞くとき

- 相手の気持ち**
・一生懸命聞くこととする気持ち
・相手のことを分かろうとする気持ち (32)
- 態度**
・相手のジェスチャーや表情を見る (12)
- 意欲**
・よく聞き、分からなかったら、もう一度聞くと、分かったらうなずき、分からないときは、はっきり言う (11)

(3) 「交流会で感じたことを発表しよう」において、留学生との交流活動を振り返り、自分なりの方法で伝えられた喜びや達成感を、友達とともに分かち合い、多様な喜びにふれることにより、進んでコミュニケーションを図ろうとする実践意欲が高まったか。(見通し3)

ア 実践の概要

交流活動で、楽しかったことや、嬉しかったことをまとめ、カードに書き込み、資料4のように模造紙にはって、同じ内容や、似ている内容のカードにグループ分けし名前を付けた。自分の振り返りや友達の意見から、外国人とのこれからの関わり方についての考えをワークシートにまとめた。

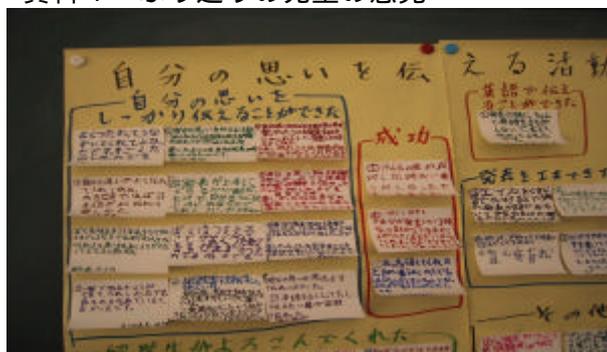
イ 結果と考察

カードには、「自分の思いを伝える活動」と、「相手の話を聞く活動」のそれぞれの振り返りをまとめた。「自分の思いを伝える活動」のカードには、自分の思いを伝えることのできた喜びや、英語などを使った自分なりの工夫により伝えられたという満足感がそれぞれの表現で書かれていた。また、「相手の話を聞く活動」のカードには、相手が質問を理解し、自分たちのために一生懸命質問に答えてくれたことへの感謝の気持ちや、色々なものを用意し、自分の国のことについて伝えようとしてくれた熱意に対する感動、お互いに分かり合えた喜び、などが書かれ、充実した交流活動に対する子供たちの熱い思いや、もっと交流したいという意欲が強く伝わってきた。子供たちは、カードの内容と一緒に、自分たちの班の活動をうれしそうにみんなの前で発表し、聞いている児童も、自分と似ている意見が出るたびに「私もそう思います」、「賛成」など、大きな声で反応を示した。

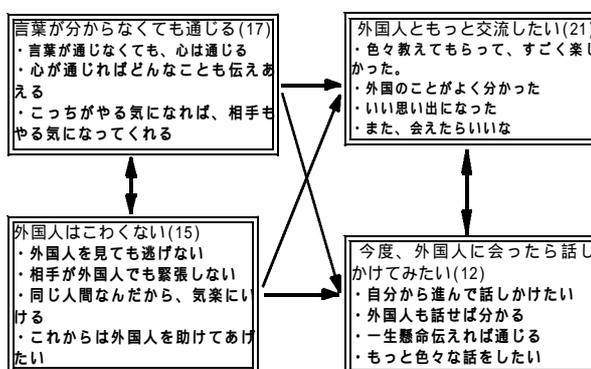
また、「また交流会をしたい」や、「大学祭に行けば、会えるかな」などと、さらに留学生と交流したいという発言もあった。資料5は、振り返りの話し合いの後行った「外国人とのこれからの関わり方について」のアンケートの結果である。この資料から、多くの児童が授業の結果、「外国人と積極的に関わっていきたい」と考えるようになったことが分かる。また、「言葉が通じなくても、心は通じる」など、コミュニケーションにおける心と心の結びつきの大切さに気づいた児童がいたこともうかがえる。抽出児童のA子も、今までの自分を振り返り、「これからは、せっきょくてきに外国人とせっしたい」と答えている。ALTに対しても、A子をはじめ、多くの児童が、自分から話しかける姿が見られるようになってきた。

これらのことから、今までの授業は、進んで外国人とコミュニケーションを図ろうとする実践意欲を高めるのに有効であったといえる。

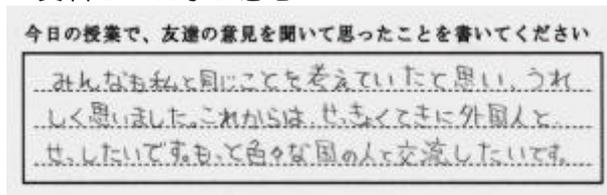
資料4 振り返りの児童の意見



資料5 外国人とのこれからの関わり方



資料6 A子の感想



研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

外国人に関わることに對して、苦手意識を持っていた子供たちにとって、留学生との交流会は、とても意義深いものであった。自分の伝えたい内容や方法を自分で考え、決めたことや、留学生の国について調べたことが、交流会に対する意識を変えることに役立ち、子供たちは、生き生きと留学生と交流することができた。また、交流会での成功体験や友達とのふり返り活動は、外国人と関わりを持つようとする実践意欲を向上させるのに、大きな効果があった。この実践によって培われた能力は、今後、子供たちが外国人とふれあう場面において、積極的に関わりを持つようとする態度につながっていくと考えられる。

2 今後の課題

外国人との関わりの機会が少なければ、コミュニケーションを図ろうとする意欲は、徐々に弱くなってしまふおそれがある。今後は、計画的、継続的に外国人との交流の機会を設け、より充実したコミュニケーション活動を児童が行えるように、活動をさらに工夫していきたい。

<参考文献>

西中 隆 他 編著 『公立小学校における国際理解』 明治図書